

永井路子

歴史を

さわがせた

女たち

外国篇



文春文庫

歴史をさわがせた女たち 外国篇

定価はカバーに
表示してあります

1978年7月25日 第1刷

1992年3月5日 第35刷

著者 永井路子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-720002-3

文庫

歴史をさわがせた女たち
外国篇

永井路子



文藝春秋

目次

*女だてらに国を動かす

| | | |
|----------------|----------------|----|
| アグリッピナ | 暴君ネロを生んだ過保護ママ | 二 |
| エレオノール・ダキテーヌ | 十字軍遠征で運命変る | 一六 |
| マルグリット・ダンジュール | 名門の花七転人生 | 二五 |
| イサベラ | 新大陸に賭けた名ギャンブラー | 三三 |
| カテリーナ・スフォルツァ | 女丈夫とよばれた美貌の城主 | 三九 |
| カトリリーヌ・ド・メデイシス | バルテルミーの火つけ役 | 四四 |
| エリザベス一世 | 家康なみの我慢と権謀 | 五三 |
| メアリ・スチュアート | 王冠を棒に振った愛欲遍歴 | 五九 |
| マリア・テレジア | 生みも生んだり十六人 | 六六 |

エカテリーナ二世

日本人も見た北国の女王

七

マリー・アントアネット

浪費夫人革命に死す

七

ヴィクトリア女王

マイホーム型もまた楽し

八

ジャンヌ・ダルク

神の声を聞いた聖少女

九

*東洋の名花はサディスト！

呂 后

ライバルを総括

一〇

則天武后

中国たった一人の女皇帝

一〇

西太后

清朝をつぶした時代錯誤夫人

一一

*伝説と神話のヒロインの正体

トロイのヘレン

美しすぎたばっかりに――

一二

エレクトラ

不倫の母に燃やした執念

一三

エウリディケ

夫の愛が不幸をまねく

一四

ブルンヒルデ

復讐に燃えた女武者

一四

ジュリエット

純情世界一

一五

フランチェスカ

不倫の恋がこの人気！

一六

サロメ

生首を愛した孝行娘？

一七

*上流社会に咲いたあだ花

クレオパトラ

鼻はさほどに高からず

一八

楊貴妃

美女をめぐる不思議な真実

一九

ルクレチア・ボルジア

イタリア版お市の方

二〇

ポンパドゥール夫人

ルイ王朝を手玉にとる

二一

*ペンを片手に大奮闘

サツフォー

レズの元祖に偽りあり？

二二

エロイーズ

恋文ベストセラーの修道尼

二三

マルグリット

女王さまは女西鶴

二二九

ジョルジュ・サンド

男装作家の恋人コレクション

二三六

ブロンテ姉妹

大作家姉妹のかかわりあい方

二三三

ローザ・ルクセンブルク

理論家そして革命の女闘士

二四〇

*夫を売り出すテクニク

コンスタンツェ・モーツァルト

天才に愛された悪妻

二四九

マーサ・ワシントン

おかみさんトップレディー

二五五

メアリ・リンカーン

名大統領を悩ませたヒステリー

二六一

あとがき

二六七

歴史をさわがせた女たち（外国篇）

○本文中の*印には
章末に註を附した。

女だてらに国を動かす

アグリッピナ………暴君ネロを生んだ過保護ママ

ドイツのライン河畔にあるケルンは、大聖堂で有名な町だ。最近その大聖堂近くで、地下鉄の工事中に、すばらしいローマ時代のモザイクの床が発見された。私がそこを訪れたときは、その床に屋根がかけられ、そのまま小博物館になっていて、そのモザイクのみごとさに、

——へえ、こんなところにローマの遺跡が……。

と感心させられたが、じつはこれは私がガクのない証拠であって、

「ケルン」

とはすなわち、コロニア、植民地ということ、紀元一世紀ごろには、ここはローマの植民地だったのだ。

なお、ついでにいうと、ここはオーテコロンの発祥の地でもあるらしい。そういわれてみれば、オー・デ・コロンとは「コロン（コロニユ）の水」ということである。

ところでケルンの地は、このかぐわしい水のほかに、史上まれな悪女をもこの世に送りだした。アグリッピナ——といってもなじみが薄いかもしれないが暴君ネロのおかあさん、といえば、ご存じの方も多いのではなからうか。

彼女の父はゲルマニクス。紀元一世紀のはじめ、ケルンをローマの植民地とするべく遠征して来たその旅先で、アグリッピナが生まれた。なお彼女の母も同じ名前なので、ふつう、母を大アグリッピナ、彼女を小アグリッピナと呼ぶ。

とにかく、たいへんな名門の娘である。家系を調べれば、ローマ帝国初代の皇帝アウグストゥスの曾孫でもあり、そのライバルだったアントニウス（クレオパトラの愛人）の曾孫でもあるという純血サラブレッドだ。

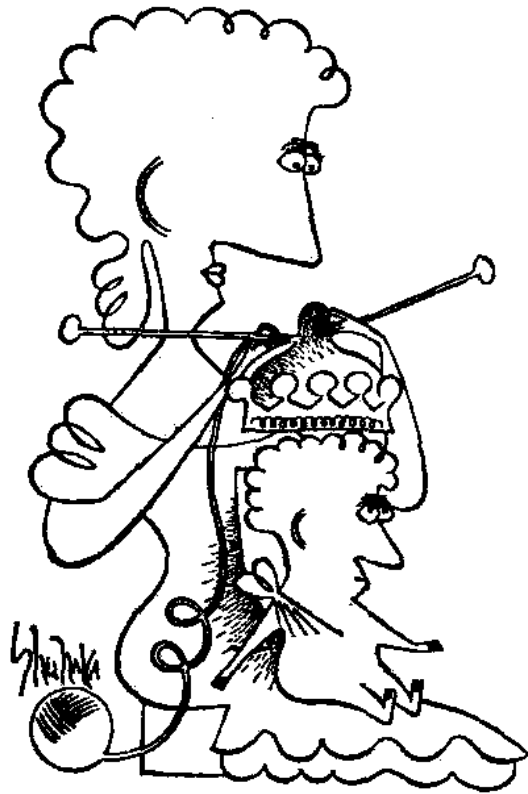
そのうえ美貌と才智にめぐまれ、十二歳で同じくアントニウスの流れをひくグナイウスと結婚し、九年めにネロを生んだ。が、そのよろこびもつかの間、第三代の皇帝になった兄のガイウスに陰謀の疑いをかけられ、ネロとも別れて島流しになってしまふ。当時の名門にはこうした血なまぐさいお家騒動はつきものだった。

もっとも彼女の流謫りうたくの生活は、さほどまで長くはなかった。ガイウスがまもなく殺されたので追放は解除され、愛児の許へ戻ったが、その間にグナイウスは病死していた。

——あわれ、彼女は若き未亡人……。

いや、御同情には及ばない。まもなく次の夫が現われた。義妹の夫だった男が、彼女の美貌に眼がくらみ、妻と離婚してまでもというご執心ぶりをみせた。

しかし、ふしぎなことに、彼女と結婚すると、まもなくこの男も死に、莫大な遺産だけが、アグリッピナ母子の手に残された。そしてこの二度めの不運が、じつは彼女に次の幸運をもたらす。兄ガイウスの後に皇帝の座にすえられた叔父のクラウディウスとの結婚話がおこるのだ。



二度めの未亡人生活から王妃の座へ——。

たった一度の結婚のチャンスさえなかなかままならないというのに、なんとという悪運の強さであろう。しかも当時のローマの法では、叔父と姪の結婚は禁じられていたというのに……。

もっとも、そこに漕ぎつけるまでには、彼女自身、現代のタレントそのこのけの大売り込みをやったらしいのであるが……。

第四代ローマ皇帝クラウディウスには、アグリッピナの前に三人の妻があった。特に三人めの妻はたいへんな悪女で、しまいには、夫を殺して別の男と結婚しようとしたのがバレて殺された。

アグリッピナがその後釜をねらったのはその直後である。一説によるとクラウディウスの側近のパラスという男と体の取引きをしてその後援をとりつけたのだともいう。

クラウディウスはアグリッピナの美貌と手管にすっかりまいてしまった。もうこうなれば法も

へったくれもなくなり、むりやりこじつけて、叔父、姪の結婚をみとめさせてしまった。もつとも、いつの時代でも、法律などというものは、エライ人の手でどうにでもなるものらしいが……。

王妃の座につくと、アグリッピナはただちに次の工作に乗りだした。連れ子であるネロをクラウディウスの三番目の妻の忘れ形見のオクタヴィアと婚約させた。これも、オクタヴィアの方ですでに婚約者がいたのを、強引におしつけて事を運んだ。

さて、こうなれば、もう彼女の魂胆はおわかりであろう。

——かわいい、わが子ネロのために……。

彼女は、自分のあこがれの的だった富と権力をわが子に伝えようとやっきになったのだ。

このとき、クラウディウスと先妻の間には、ブリタニクスという男の子がいた。本来ならその子があとつぎになるはずだから、それを押しつけるには、ネロをオクタヴィアと結婚させるよりほかはなかったのだ。

が、考えてみれば——。

「連れ子ともどものお家乗っとり」

は、どこにでもある話である。ただ舞台が古代ローマであるだけに、何となく大がかりに見えるが、現代だって、こんなことはよく起きている。

つまり、アグリッピナは、原理的には、チンピラ悪女と変りはないのである。

「わが子のためには手段を選ばず……」

そこだけぬきだしてみるなら入試競争に夢中になるママゴン族とも変りはない。そういえば、

彼女は、ネロのために大学者セネカを家庭教師に選んでいる。アルバイトの大学生ならぬほんものの大学者を選んだあたりは、さすが王妃の貫禄であるが。

このまま計画通りにゆけば、彼女もせいぜいチンピラ悪女どまりだったのだが、ここで思わぬ障害が起きた。彼女の言うなりだった夫が、

「ブリタニクスのこととも考えてやらぬとなあ」

と言いだしたのだ。

——さあて、これはたいへん……。

内心顔色をかえた彼女は、非常手段を思いつく。夫の好物のキノコ料理の中に、毒を仕込んだのだ。クラウディウスは一口食べるなりひっくりかえったが、皮肉にも、まもなく意識を回復し、ゲエゲエやったおかげで、命をとりとめてしまった……。

アグリッピナは進退きわまった。

毒殺しようとした夫に生きかえられては、自分の命が危ない。

「早く来て、早く王さまを見てさしあげて」

大声で医者をおよびつけ、目くばせした。

「かしこまりました」

駆けつけた医者は、クラウディウスのどに鷺鳥の羽根をさしこんだ。治療すると見せかけ、その羽根には、じつは恐るべき毒薬がぬりつけてあったので、今度こそ確実に彼はあの世に送られてしまった。